

# 地域と環境

No.17 2023.3

Region and Environment

## 小方登先生御退任記念特集号

---

特集号の発刊にあたって

第I部 小方登先生の略年譜と業績

第II部 論文

彙報

博士論文要旨

修士論文要旨

研究室だより

---

京都大学大学院人間・環境学研究科  
「地域と環境」研究会

# 特集号の発刊にあたって

本号は、本年3月末をもって京都大学を定年退職される小方登教授のご退任を記念した特集号です。多数掲載されている充実した論考は、小方ゼミを巣立った研究者の熱意が集まったものです。

小方先生は2001年に人間・環境学研究科に着任され、爾来22年間にわたって京都大学の教養教育において地理学を講じられるとともに、大学院ならびに総合人間学部では人文地理学を基盤として学際・越境をめざす地域空間論研究室で専門教育に尽力され、多くの修了生・卒業生を社会とアカデミアに送り出してこられました。小方先生のご研究は多岐にわたりますが、とくに現代都市を数量的手法により解明されたことと、コンピューターによる地理情報処理の探究、なかでも衛星画像分析を歴史地理学へ適用されたこと、2つの領域を拓いてこられたことがあげられます。

小方先生は化学研究者を父に法学者の娘を母に、京都でお生まれになりました。大学教員となられたのは家業を継ぐようなことだったのかもしれませんが、青年期の鴨沂高校での交友が半世紀たっても広く深く続いているように、京都をふるさととして研究生活を続けてこられました。京都大学文学部に入学され、地理学を専攻されてからは、卒業論文と修士論文がいずれも学術誌「人文地理」に掲載された俊英として知られる存在となりました。日本の地理学においても計量革命をうけて論理実証主義的な研究の勢いが強かった時期に学界に登場された小方先生は、その最先端にある「時空間分析」に取り組み、都市の人々の行動を空間と時間の両面から解明されました。

小方先生は博士課程在学1年で奈良大学に就職され、その後、奈良女子大学に移られました。若手研究者として奈良をホームグラウンドとされたことは、歴史景観の衛星画像分析の先駆者となるために、重要な場所の力を得たとみなされます。近代的改変以前の景観を知るために、コロナ衛星画像の活用がいち早く取り組まれたことは、その後の歴史学・考古学の研究者との学際的研究につながりました。そこに地理情報システムの深い理解があることは言うまでもありませんが、小方先生の趣味としてよく知られている写真撮影についての関心と知識があったことも見逃すことができません。

最終講義に際して寄せられた卒業生・修了生・研究者からのメッセージにあらわれているように、誠実にそして丁寧に周囲の方々と接してこられた小方先生は、これからもふるさと京都における多様な関係性をさらに発展させてゆかれることでしょう。

2023年3月 小島泰雄

目次

特集号の発刊にあたって .....	i
目次 .....	ii
<b>第Ⅰ部 小方登先生の略年譜と業績</b>	
退職に当たって（小方 登） .....	1
略歴 .....	3
研究業績 .....	4
I 論文 .....	4
II 訳書 .....	6
III その他 .....	6
IV 主な招待講演等 .....	8
小方先生へ贈る言葉 .....	10
<b>第Ⅱ部 論文</b>	
山村 亜希：中近世岐阜の都市空間における城と町 .....	21
安藤 哲郎：古典を活かした滋賀の旅の創造に向けた検討 —石山寺を事例として— .....	37
阿部 美香：昭和 34 年の機屋分布にみる西陣織産業の空間構造 .....	53
上杉 昌也：グローバル都市住民の格差意識の国際比較 —国内格差拡大と地域間格差拡大に対する認識— .....	70
布施 綾子・福島慎太郎・小方 登：兵庫県における人の野生動物に対する意識 —猟師の野生動物に対する意識調査 —猟友会会員に協力を得て— .....	82
長島 雄毅：幕末の天津・太間町における人口変動 .....	104

夏目 宗幸：近世前期「御鹿狩之場所」の所在に関する一考察	119
林 紀代美：奥能登地域での市場を介さない 食品のやり取りの実態と人々の認識	126
小原 文明：台北市における伝統民居の立地と保存・活用状況	145
鍾 翀：明代以来、上海県城プランの形成とその変遷 —中国江南地域における「市鎮」都市の原風景に追って—	160
石田 曜：近代期瀋陽の北市場の実態に関する一考察	170
潘 藝心：中国都市の変容 —タンウェイから街道・社区へ—	181
北西 諒介：多摩ニュータウンにおける地名の命名原理	188
藏田 典子：東日本大震災の被災者・避難者研究で浮き彫りになった 研究上の課題と今後についての考察	208
三好 志尚：三国湊の景観変化と福井藩による港湾整備	222
村上 晴澄：近世東海道における新宿の立地条件	247
森下 航平：地方大学における地域連携をめぐる地域的重層性 —福知山公立大学を事例に—	263
金坂 清則：御実家法養寺訪問がきっかけになっての足利健亮先生の写真の発見と解説 —ツイン・タイム・トラベル、不思議な縁と「形見のアルバム」—	281
<b>彙報</b>	
博士論文要旨	361
修士論文要旨	365

研究室だより .....	371
編集後記 .....	378

## Contents

### Editorial

On the Publication of this Special Issue .....	i
--	---

### Part I Profile and Works of Professor Noboru OGATA

On the Occasion of Retirement

Noboru OGATA .....	1
--------------------	---

Profile of Professor Noboru OGATA .....	3
---	---

Works of Professor Noboru OGATA .....	4
---------------------------------------	---

Message for Professor Noboru OGATA at Final Lecture on February 17 .....	10
--	----

### Part II Articles

The spatial relationship between the castle and the town  
in the medieval and the early modern Gifu

Aki YAMAMURA .....	21
--------------------	----

Study of the creation of travels in Shiga by utilizing classical literature:  
Case study of Ishiyamadera Temple

Tetsuro ANDO .....	37
--------------------	----

Spatial arrangement of Nishijin textile industry  
as seen through the distribution of weaving workshops in 1959

Mika ABE .....	53
----------------	----

International comparison of global city residents' perceptions of inequality:  
Are national income gap and regional disparity growing?

Masaya UESUGI .....	70
---------------------	----

People's attitude toward wild animal in Hyogo Prefecture, hunter's attitude survey toward wild animals: Conducted with aid of Hyogo Hunter Club Ayako FUSE, Shintaro FUKUSHIMA & Noboru OGATA .....	82
Population change in Taima-cho, Otsu toward the end of Edo period Yuki NAGASHIMA .....	104
Locating the shogunal deer hunting ground in the early Edo period Muneyuki NATSUME .....	119
Actual trends and attitudes toward the non-market exchange of foodstuffs in the Oku-Noto region Kiyomi HAYASHI .....	126
Location and condition of traditional residences in Taipei City, Taiwan Takeaki KOHARA .....	145
The formation and changes of the plan of old Shanghai town since the Ming dynasty: Seeking the original scenery of the towns in Jiang-nan region of China Chong ZHONG .....	160
A study on actual situation of Beishichang in modern period Shenyang, China Yo ISHIDA .....	170
The change of China city: From danwei to jiedao and shequ Yixin PAN .....	181
Naming principles of place names in Tama New Town Ryosuke KITANISHI .....	188

Discussion of research issues and future challenges highlighted by the study of victims and evacuees of the Great East Japan Earthquake Noriko KURATA .....	208
The changes of the urban landscape in port town Mikuniminato and the port development in the Fukui clan Yukitaka MIYOSHI .....	222
Location of new post stations in the early modern Tokaido Haruto MURAKAMI .....	247
Regional layers of regional collaboration by local universities: A case study of The University of Fukuchiyama Kohei MORISHITA .....	263
The discovery and deciphering of late Professor Kenryo Ashikaga's photographs by an occasion of visit to Hōyōji Temple, his parental home: the results of the Twin Time Travel, some mysterious marriages and his "memento album" Kiyonori KANASAKA .....	281
<b>General news</b>	
Summary of Doctor's Thesis .....	361
Summary of Master's Thesis .....	365
News .....	371
Editorial Postscript .....	378



# 第 I 部 小方登先生の略年譜と業績

---

## *Part I Profile and Works of Professor Noboru OGATA*

退職に当たって（小方 登） .....	1
略歴 .....	3
研究業績 .....	4
I 論文 .....	4
II 訳書 .....	6
III その他 .....	6
IV 主な招待講演等 .....	8
小方先生へ贈る言葉 .....	10

## 第II部 論文

---

*PartII Articles*

# 彙報

---

*General News*

# 博士論文要旨

2020 年度

## 江戸近郊の拡大と展開

一 武蔵野古新田千町野の開発を基軸として一

夏目宗幸

本研究は、これまで「孤立した理想的畑作村落の建設」と見做されてきた武蔵野古新田千町野の開発計画について、武蔵野全域と個別村域の中間スケールともいえる千町野地域を分析対象とし、これに地理情報システムの分析手法を利用することによって、従来の定説に新たな知見を加味しようと試みた。

千町野における最初期の開発段階は、幕府による政治的地域掌握としての側面を有していた。千町野の開発に先立ち、将軍家の鷹狩の拠点となる御茶屋が設置され、多くの鷹狩・鷹場管理の職能武家集団が開発に関わった。武蔵野への政治権力の進出にあたり、鷹場化と新田開発とが一体となって行われ、両者は密接不可分の関係性にあることを明らかにした。

中間期の開発段階は、江戸の都市計画と連動する側面を有していた。検地帳に基づく地割復原により、千町野の村落は、1間を6尺5寸とする京間の丈量法を用いていることを明らかにし、その設計思想には、オランダ東インド会社や江戸の町割を担当する幕閣の関与を背景とする、江戸の町割手法の影響を受けている可能性を指摘した。

開発の最終段階は、実験的畑作村落の建設としての側面を有していた。支配代官・手代や、鷹狩・鷹場管理職能を持つ武家集団など、当初より千町野と深い関係性を有する人々の関与が継続する一方、新たに全国の幕府直轄領において河川普請や新田開発の経験を重ねた、技術官僚的武家集団も加わったことを明らかにした。

上記の三つの開発段階の特徴的側面を念頭におくと、近世初期における千町野の地域像は、「孤立した理想的畑作村落の建設」という、統一的計画に規定された地域と見做すべきではなく、新田開発で

ありながらも、拡大する江戸の近郊に取り込まれて行く過程において、都市的要素を包含しつつ、それぞれの段階における経緯が複雑に交錯する多面的側面を包摂した地域として再定義すべきであると結論付けた。

2021 年度

## 蘇南地域における都市の開発・再開発に関する都市地理学的研究

潘 藝 心

本論文は蘇南地域を対象地域として、中国都市の都市開発・再開発に関する都市地理学的研究である。

第1章では、本論文の研究テーマ、すなわち開発・再開発の意味と各章の関連性、ならびに研究対象である蘇南地域について詳しく述べた。また、諸テーマに関する中国、日本および欧米の先行研究を整理した。

第2章では、蘇南都市の行政区画について論説した。前近代から中華民国期における行政区画の再編と行政階層の変容を整理した上、「地級市」を中心として現在の中華人民共和国の行政区画を検討した。また、都市内部の城区と郊区の再編、および地級市の中心都市と所轄した県の関係などの側面から、蘇南都市における行政区画とその性格を明らかにした。

第3章では、蘇南都市の都市空間について考察した。蘇南地域の無錫を事例として、都市空間と都市構造を軸にして、蘇南都市の都市地理と都市史を再考した。前近代の囲郭都市と“多区組合”モデルに近代都市を捉えて、中華人民共和国の蘇南都市を考察した。本論文で採用した特別な時期区分が示すように、タンウェイ制度とその弱体化を明らかにした。

第4章では、蘇南都市の性格転換について検討した。蘇南地域の南京を事例として、いわゆる消費

都市から生産都市へ転換したプロセスを提示した。同時に、その中の都市計画、タウンウェイ、および工人新村と街道などの要素の役割についても検討した。また、無錫と南京の代表的な事例に関するケーススタディを通して、生産都市からの都市再開発を考察した。

第5章では、本論文の造語である内城インナーシティに焦点を合わせて、もう一度蘇南都市無錫の都市地理と都市史について考察した。まず、内城インナーシティの内包、および老城区との関連性を解説したうえで、地価構造の視角から近代無錫の都市構造を細部まで明らかにした。また、水系と道路の再編、およびタウンウェイと工人新村の状況から、タウンウェイ制時期の無錫を再考した。最後に、都市再開発と関連した商業空間や都市イメージの変容から、ポストタウンウェイ制時期の変容について考察した。

2022年度

## 地名の使用とその機能に関する 文化・社会地理学研究

北西諒介

本論文は、地名研究あるいは地名学における理論の不足を補う観点から、地名の使用とその機能に関わるいくつかの課題に着手し、地名に関する理論的体系の確立の一端を担うことを目指したものである。

地名を取り巻く近年の社会的な状況として、地名標準化やさまざまな地名問題への対処が求められる一方、従来の地名研究の成果は地名の歴史的価値を強調しつつも、日常的に使われる語彙の一部としての地名の役割を十分に論じてこなかった。

上記のような問題意識を踏まえ、第1章ではこれまでの地名研究の展開と近年の動向について概観した。既往研究の整理から、地名の機能や性質に関する理論に議論を還元する方向性と、地名の使用への着眼という、二つの点で不足があったことを指

摘した。

第2章では、大阪府の千里ニュータウンを対象に、開発地域、あるいは近現代の地名の命名の特徴を明らかにし、地名が景観や地域社会とどのように関わり合ってきたのか、その相互作用を明らかにした。千里ニュータウンでは開発主体や住民らの意識や、開発による景観の一新を背景に、共通した命名原理を持つ地名が名づけられ、ときには命名による空間の分節化が先行し、後から景観が形成されたことも確認された。また、補節として東京都の多摩ニュータウンの事例との比較を行い、近現代の地名命名の一般的傾向についても指摘した。

第3章では、同じく千里ニュータウンを例に、多様な主体による多様な意味づけの重なり合う結節点としての地名の働きに着目した。地域活動に関わる行政・住民らにとっての地名「千里」は、空間的には千里ニュータウンという建造環境よりも広く捉えることが可能であり、それゆえに空間的に曖昧な存在と解釈されていた。地域活動の面ではその曖昧さゆえに、その地域に関心のある者を広く包含してまとめ上げる結束の機能を果たしていることが指摘された。

第4章では、富山県の高岡市を事例に、地域住民らにとっての町名の位置づけとその変容について明らかにした。昭和期の住居表示と2010年代の旧町名復活という2度の町名変更を経験した高岡では、町名が形式的な住居表示町名と通称地名的な旧町名という二元的なあり方が確認され、それぞれが機能を分担し合ってきたことを明らかにした。また、町ごとに町名や町名変更に関する歴史の認識には差異があることも確認された。

終章では、本論文のまとめとともに残された課題について示した。

## 近現代における

### 強いられた移動と故郷喪失

—建物疎開と東日本大震災を事例に—

藏田典子

本論文では、「強いられた移動」がもたらした人々への影響と、対象者にとっての故郷喪失感情を扱った。本論文が扱う「強いられた移動」には、ふたつのタイプがある。第一は、狭義の強制移動である。太平洋戦争中の建物疎開や福島原発事故にもなる避難指示のように、公権力によって居住が禁止されたことで、対象者の意思決定によらずに移動を余儀なくされるものである。第二は、対象者による意思決定は存在しているものの、自然災害や紛争などの影響で居住を続けることがきわめて困難になったため行われる移動である。本論文では、これら両者を「強いられた移動」の対象者として扱った。本論文の特徴は、データサイエンスや人口地理学の視点から実施したマクロ的研究と、聞き取り調査やフィールドワークなどで個別の事象を丹念に追うミクロ的研究の双方を実施したことにある。

第 II 章では、狭義の強制移動であった、太平洋戦争末期の京都市における建物疎開に関する研究を扱った。

第 III 章からは、東日本大震災による強いられた移動を事例とした研究を提示する。第 III 章では、東日本大震災に関する日本語の研究成果(学術論文など)のタイトルを網羅的に検索し、タイトル情報をテキストマイニングで自動解析することで、各研究タイトルをクラスター分類することに成功した。第 IV 章では、英語で発表された東日本大震災研究のテキストマイニング分析を行った。

第 V 章では、データサイエンスを活用することで、東日本大震災によって生じた広域避難者の移動の態様を全国規模で明らかにした。第 VI 章では、東日本大震災で生じた広域避難者の避難行動についての研究を示した。事例として京都府下への広域避難者を対象とした聞き取り調査を行い、避難の意思決定過程を類型化した。第 VII 章は、福島県大熊町の「全町避難」を事例として、原発事故発生当時の苦難と、教育機関など行政機能の一斉移転というつげんの難事をどのように乗り越えたのかを記録し、分析を行った。第 VIII 章は、福島県を中心としたフィールドワークおよび被災者・避難者研究についての今後の展望を述べた。

本論文の最後となる第 IX 章では、第 II 章から第 VIII 章を取りまとめることで議論の展開を総括し、今後の研究の進展のための提案を行った。本論文では、近現代における強いられた移動について、個別具体的に綿密なフィールドワークと、データにもとづき状況を概観する量的研究を組み合わせることで、包括的な理解を達成することができた。今後、日本や世界では、残念ながら災害や戦争、気候変動などが原因となって強いられた移動が生じる可能性が多々ある。その際に、本論文で得られた知見を活用することで、被災者や避難者が感じる精神的ストレス、とりわけ故郷喪失感情を意識して、十分なケアを行うことが可能になることを切に願う。



# 修士論文要旨

2020年度

## ジオタグ付き写真による 京都市の観光実態と観光スポットの 空間構造に関する研究

張 鯤 翼

本稿では、観光客の観光実態と観光スポットとの相互関係を、データ分析を通じて検証した。フリッカーで公開されたジオタグ付き写真を用いて、クラスター分析による観光スポットを抽出し、2015年から2018年まで京都市における観光客が訪れた主要な観光スポットの時空間分布について検討した。社会ネットワーク分析手法を利用し、観光ルートから形成する人流ネットワークを構築し、観光スポットの地位と相互関係を分析した。最後に、アクセシビリティ分析手法を用いて、実際の地理空間における異なるタイプの観光スポットの立地を解明した。結果として、嵐山、伏見稲荷大社、清水寺、金閣寺の4つの観光スポットが多くの人流ルートに位置しており、観光ネットワークの1つの核として密接に繋がる事実がわかった。また、宿泊施設の立地が抽出した観光スポットのアクセシビリティに大きく影響し、観光客が上京区、中京区、下京区という3つの中心地に集中して宿泊する。観光スポットへのアクセシビリティのバランスをとるためには、宿泊施設が周辺地域に立地するように、分散させることが必要である。

## 近世後期京都の買物案内にみる宿泊業

—『京都買物独案内』の  
「諸国定宿」を中心に—

松 岡 宏 樹

本稿では近世京都の買物案内である『京都買物独案内』(以下、『京買』)を史料として用い、宿泊業の空間パターンと都市構造との関係について考察す

ることを目的とした。まず『京買』の刊行に携わった編者や板元等の分析を行った結果、編者・板元の一人である清水屋の意向が内容に反映され、清水屋に関連する店舗への集客が主な編集目的の一つになっていたことが分かった。また『京買』に掲載された全店舗の集計と地図化によって、『京買』に服飾関連・薬・衣料品を扱う商店が多く掲載され、三条通・四条通・松原通の東部を中心とする東西道沿いに繁華な地域が存在したことが明らかになった。さらに、『京買(嘉永版)』の重要な項目である「諸国定宿」に掲載された宿泊業者を分析し、近江や山陰、北陸が京都の商家にとっての集客圏・市場圏として認識されており、それらの地域からの商用旅行者を止宿させる宿泊施設が南北道に多く分布したことを指摘した。

## 現代日本における 境界の決定・変更に関する地理的考察

村 上 才 門

本研究では、抽象的に地方自治体間の意見の不一致と捉えられている現代の境界紛争を地域に存在する背景や自然条件から捉え直すことで個別具体的な問題として捉え直し、法学的な議論と地理的な議論を結びつけた。法令に規定された境界を具体的な存在として捉えるために地形図の判読および国郡全図の判読・比較を行い、江戸時代の旧国境の曖昧さが現在に至る境界紛争の原因の1つであることを明らかにした。法的に未定境界が決定した事案から、境界決定の過程で考慮される要素として、境界の明瞭さや紛争の背景にある社会的作用、地理的条件等が存在することを明らかにした。法的な境界を具体的な存在として捉え、境界の決定や変更に際して金銭的利益のみならず、行政上の問題に起因して問題が発生し、その解決に当たって歴史的経緯や地理的条件、漁業権、環境保全等の問題が個別に考

慮されることを明らかにした。

2021 年度

## 印パ・中ロ・日韓国境の観光にみる ナショナリズム

油 田 昇 太

国境地域における観光は、文化交流や学習の場としてツアーが組まれるなど、一つの友好拠点として捉える動きが注目され始めている。一方で、海外にはナショナリズムが強く結びつく例があり、その実態を明らかにした。

そこで、印パ国境のワーガ、中ロのヘイシャーズ島、日韓の竹島の3地域を取り上げ、地名や施設などの地理的な分析、テキストマイニングや新聞記事等の分析からナショナリズムとの関連を探った。

その結果、これらの地域では、自国に対するアイデンティティをより強固にし、ナショナリズム的な感情が揺さぶられるような仕組みが備わっていることが分かった。

また、ワーガではかえって友好を示す貴重な場になっていること、ヘイシャーズ島ではインフラ開発により経済振興が進んだこと、竹島では実効支配の強化につながっていることなど、マスツーリズム化による“恩恵”も大きく、国境観光の発展は、ナショナリズムとの関連を無視することはできないといえよう。

## 近代兵庫県沿岸部における 工業化と地域社会

上 田 航 平

明治・大正期の兵庫県は南部の沿岸地域を中心に工業化が進んだ。そんな同時期の加古川・高砂地域の工業化を主題とする研究は管見の限り見当たらなかったため、各種統計および文献から検討した。

人口および工業統計からは、加古郡では工業化の

傾向が明治期の早くからみられるも印南郡においては工業化の開始時期は遅れていたことがわかった。また、加古川・高砂地区では鉄道の便と加古川の水利が工場設置に大きく影響し、国鉄山陽本線へ港を起点とする複数の軽便鉄道が接続されることで鉄道輸送の体制が整えられ、さらに工場の原材料移入を担った港湾が発展した。

大工場の立地した町では町域や工場敷地に拡大がみられたが、その他における町勢等への影響は薄い一方、工場が導入した新たな習慣や施設が地域に根付くこともあった。同時に、工場用地の買収や稼働後の排水・悪臭等はときに地域住民を苦しめ、地域住民間の分断の火種にもなっていたことがわかった。

## 茶馬古道における 古い町の持続可能な発展について —沙溪古鎮を例に—

王 韵 堯

中国にはもう一つのシルクロードと呼ばれる「茶馬古道」があり、中央部のお茶と西域チベット族の馬の物々交換貿易を促進した。交換場所として、茶馬古道に沿っていくつかの町が栄えた。しかしながら、現在茶馬古道の商業交易機能が低下しており、古道貿易に従って栄えた町では交換場所としての機能を果たさなかった。

本論文は、茶馬古道沿線の古い町である沙溪古鎮を研究対象として、古道と沿線の町との関係性を探究し、古い町の発展現状と持続可能な発展を考察することを目的とする。研究方法として、事例研究、文献資料研究、研究対象地域の政府関係者と経営者との聞き取り調査の研究を複合して考察する。既存の沙溪古鎮の復興プロジェクトを検討し、保全事業の現状を分析する。また、政府関係者との聞き取り調査内容を合わせ、沙溪古鎮復興プロジェクトの始末と古鎮の主な変化、プロジェクトに対する住民の見方と反響、保全事業の問題、未来古鎮の発展プランなどを考察する。古道特色のある観光業を発達さ

せ、沿線の町において持続可能な発展を実現させるための課題を探究する。

## アートプロジェクトと地域づくり

—香川県直島における

瀬戸内国際芸術祭を例として—

関 薇

本研究では瀬戸内国際芸術祭を事例に、地理学の視点からソーシャルキャピタル分析を用いて、アートプロジェクトによる地域づくりの効果について考察し、アートと地域のつながりについて明らかにした。第2章では日本における文化芸術による地域活性化政策の変遷を整理し、観光資源としてのアートプロジェクトによる地域活性化の効果が期待される必然性を解明した。第3章では、地域活性化の効果の検証として、瀬戸内国際芸術祭による地域住民への影響に注目し、聞き取り調査の結果を基に、ソーシャルキャピタル概念と結びつけて住民の意識変化を分析した。第4章では、芸術祭が行われる前の直島町において、企業城下町からの産業転換と観光開発が失敗した理由を文献調査から明らかにし、近代の直島町とアートプロジェクト以降の「アート観光」による街並みの様子について、地図を用いて説明し、アートと直島がどのように互いになじんでいるかを明らかにした。

## 近世後期東海道宿場町における 宿泊施設の立地傾向

小 出 桂 矢

本論文では宿場町の空間構造に迫るために、近世後期の東海道宿場町における旅籠屋や本陣・脇本陣といった宿泊施設の立地傾向を明らかにした。近世東海道宿場町の多くは在郷町に分類されるが、その都市形態はさまざまである。そこで、『東海道宿村大概帳』に記載されている要素ごとに町が有する機能、沿道状況、町の宿泊業への依存度を分析し、『東

海道分間延絵図』からわかる宿場町の主要施設の立地を推定した。これらをもとに在郷町のなかでも宿場以外の都市的機能がないような宿場町に着目し、地割を復元して近世後期の町並絵図などをもとに把握した宿泊施設の立地傾向について考察した。結果、本陣・脇本陣の数や分布傾向は宿場町ごとに異なるものの、これらの公的な宿泊施設の周辺に旅籠屋が集中する傾向が見られた。また、宿泊施設以外にも着目するとそれぞれの宿場町ごとの形態的特徴と宿泊施設の立地とが関連していることがわかった。

2022年度

## 近代用水における 水利の変遷と地域の変容

—琵琶湖疎水を事例に—

小 森 千 賀 子

本研究は、近代用水と地域の関係性の解明をテーマとしている。本稿では、京都の近代用水である琵琶湖疎水を事例に取り上げ、先行研究で論じられてきた都市の形成という視点ではなく、地域の変容に着目し、用水における水利の変遷と地域との関係性について分析考察を試みる。まずは、多目的用水である琵琶湖疎水の水利の全体像を俯瞰した上で、今まであまり取り上げてこられなかった灌漑用水に着目し、地域と水との関係性について実態の一面に迫る努力をする。前提として地域の変容を用水との関係性のみで論じることができないことを踏まえた上で、琵琶湖疎水開通前の地域の状況を明らかにし、その後の地域の変容について整理する。

地域の変容の細部を捉えた上で、再度水利の全体構造の枠組みと地域との関係性という視点に立ち返り、近代用水における水利の変遷と地域との変容について総括的に論じる。

## 中国東北地域における 満族伝統民居の変遷

仇 楚 文

本論文では、満族の歴史発展を概観し、現在東北地域における満族集住区の空間分布状況を分析した。また、歴史上満族居住域の変遷に着目すると、満族住居に対して発展期、衰退期と繁栄期に分けられて、各時期の伝統住様式の変化を考察した。さらに岫巖満族自治県を代表的な研究対象地域にし、CORONA 衛星画像と Google Earth 衛星画像を比較対照することで、対象集落の全体的空間変容に対して分析を行った。それらをもとに、東北地域にある遼寧省の満族民居に対する実地調査を通じて、満族伝統民居の營建特徴と地域特性が存在していることとわかった。最後に、現在満族伝統民居が直面している問題を取り上げて、現代満族住民の居住欲求を分析することで、満族伝統民居未来の発展方向について提案する。

## 社会変化に伴う 祠堂の景観の変容について —中国東莞市を事例として—

岑 曉 玲

本論文では、明代から2013年にかけて東莞市麻涌鎮を対象として、祠堂景観の変容過程や要因の解明を試みた。まずは麻涌鎮の陸地形成の考察を踏まえて、明代から民国期にかけて移民と地形の要素を同時に作用している結果、祠堂は麻涌鎮の中心部に向かって、東部や北東部に広がっていった。その他の雑多な姓の祠堂は、北部と南部に分布していることが分かった。中華人民共和国建国後、政府に没収され祠堂は機能が変わり、大躍進政策と文化大革命でそれぞれの破壊を受けた。1978年から伝統文化に対する再評価による祠堂の修築や再資源化による政府は祠堂に対する大きな支配力を持っていると言える。そのため、祠堂が文化的景観として計画に盛り込まれるが、建築物しか維持しておらず、祠堂の伝統文化を維持することではないといえる。以

上から、祠堂を景観として開発を行う際に宗族の意見を尊重することでより良い伝統文化の維持ができると筆者は考える。

## 京都市における 小売業店舗集積の地理学的分析

孫 錦

本研究では京都市人口集中地区の小売業店舗の業種集積特徴を、商品の探索や移動コスト削減効果が要因による「同業種集積」と効率的な多目的買物出向が要因による「異業種集積」の二つに分けて分析した。同業種集積に対して、地理的分布パターンポアソンモデルを用いて業種ごとの分布パターンを識別し、立地特徴を明らかにした。具体的には、各業種が「規則的なパターン」、「ランダム・パターン」、「集中パターン」の3つのパターンのいずれに従うかに分類して分析した。異業種集積については、主成分分析という統計的な研究方法で4つの異業種集積タイプを得た。具体的には、「買い回り品集積」、「生鮮食品集積」、「アパレル集積」と「二輪類集積」であり、立地分布を明らかにした。以上のように、マクロ的な視点から小売業店舗の分布状況を明らかにした。

## 中国の農業集団化に関する研究

—尹家溝村を例に—

趙 冠 瑋

本稿は尹家溝村の変革を考察し、調査地域の農業集団化期、公共財の供給効果についてを評価した。そこでまず、尹家溝村の行政管理についての把握を試みた。その際、尹家溝村の幹部が村民から選ばれ、上層部と農民を繋がる中枢として働いていた。また、政治運動や初等教育の普及を通じ、農民と幹部を教育し、現代化に向かって進めるように激励した。次に、尹家溝村の経済について考察する。尹家溝村の現金収入項目は、主に農業からの収入と副業からの

収入に依存している。村民の賃金については、生産隊が賃金を現物支給と金銭支給とを併用している。その上で、農業技術の進歩によって、農業の生産力を上げた。最後に、尹家溝村の公共財を発展することで、産業モデルは、「農業中心の多様な経営」から「多様な産業」へと変化していくことになった。また、農業技術の普及、インフラの整備や裸足の医者や私設教師の普及などで、農村と都市の格差を大きく緩和した。

### 蘭州市の都市更新による 空間構造・居住環境の変遷

陳 則 新

本研究は蘭州市における都市更新に着目して、二つの段階で異なる経済発展目標をめざしているうちに行われた都市更新の方式と過程を研究してきた。全体的に、蘭州市の都市更新は課題解決をめざしたものである。手段と方法は、大体政府主導と不動産開発業者主導という二つの上から下への更新である。

1978年～2000年の蘭州市旧城改造の目的は、住宅問題を改善することであった。「類単位」小区と「単位」による「生産+生活」モデルに基づく空間パターンを形成していったのである。2000年以降工業跡地の再開発につれて、職住分離の状況、副都心が形成されつつある。「城中村」の改造は、都市と農村の土地利用の矛盾の刺激と、住民が土地との関係の変化の中で新しい生産と生活の方法を求めることから進行している。そして、以上に基づいて、居住環境の変遷を考察した。

最後に、蘭州市の都市更新に存在する問題について、先進国の参考となる経験をめぐり私見を提示した。

### 近代都市空間における公設市場の立地 —戦間期名古屋市を事例として—

塚 本 まゆ子

本論は、戦間期の名古屋市を事例とし、小売商業機能を備えた政策的施設としての特性を有する公設市場が開設に至るまでの構想・計画と、その実施過程、開設後の展開を明らかにした。名古屋市の公設市場は、市内5箇所を設置された後、2段階で増設が計画された。増設計画では利用区域の拡大が目的とされ、市域全体に候補地が挙げられたが、部分的にしか実現されず、分布に偏りが生じた。また公設市場の販売人は、市場付近や、販売品目の集散地・生産地に所在する傾向にあり、自らの営業規模拡大につながる動向を示した。加えて新市部では、公設市場が都市形成の要素として機能したが、開設後は周辺地域の状況に強く影響を受け、利用が低迷する場合があった。以上の考察から、名古屋市では、市街地の状況や、販売人といった各主体の動向、公設市場の立地特性が影響し、公設市場の構想や計画と、その実施過程や開設後の利用状況との間に差異が生じたと考えられる。

### パーソントリップ調査データを用いた 通勤交通特性分析

—大阪市大都市圏を例として—

楊 奕 珉

本研究では、大阪市大都市圏における出勤を目的としての交通特性を検討した。第五回のパーソントリップ調査の結果をもとに、性別、年齢階層別、職業別などの社会性質に分けて通勤活動の特性を分析した。大阪市都市圏内の通勤活動の特性は、以下のように要約できた。

まず男女別について、男性のトリップは工業の発達した地域、女性は商業や第三次産業の発達した地域に移動する傾向が強いようである。年齢層別では、全体の通勤トリップ数は年齢との関係で正規分布となっており、男女とも中年期は自動車通勤が多く、若年期は鉄道などの公共交通機関を代表的な移動

手段とする。職業別で、専門的・技術的職業に従事する人の通勤数が最も多く、事務従事者が鉄道を選択する割合は、自動車より高い。最後に、運転免許と自家用車の両方を持つ通勤者は、鉄道通勤を選択する人もかなり多い。

## 歴史的都市における 空間機能の変遷と観光開発 —世界遺産平遥古城を例として—

劉 姝 恵

山西省晋中市平遥県に位置する平遥古城は中国漢民族地区で最も完全に保存されている歴史的城郭都市である。西周宣王の時代（紀元前 827 年～紀元前 782 年）に創建され、13 世紀以降、建て替えと拡張が何回も行われ、明清時代に全国有数の商業都市及び金融中心として成長してきた。新中国建国前後、特に改革開放の頃に中国全土で広がった大規模な都市建設活動の中でもほぼ破壊されず、建物や道路など明清時代の空間構造までも基本的にそのままに保存されている。本稿では、平遥県志などの史料、新聞記事、政府統計データ、または CONORA 衛星写真、地図、POI などの地理的データに基づき、平遥城の都市発展過程を四段階に分け、それぞれにおいて、政治・軍事都市、商業都市、生産都市、観光都市という属性を示してきたと結論付け、その都市機能変化をもたらした要因に関する分析を行った。

# 研究室だより

(2021年1月～2022年12月)

2021年

・ 1月24日

山村は関市協働推進部文化課・関市立図書館主催の『関市制70周年記念・合併15周年記念行事講座』にて、「絵図・地図から読む関のまち」の講演を行った。

・ 1月

小島が共著者となった中学校地理教科書『社会科中学生の地理—世界の姿と日本の国土』（帝国書院）が刊行された。

・ 2月5日

黄崢崢は京都大学・人文科学研究所「近現代中国の制度とモデル」共同研究班において、以下の発表を行った。「1931年江淮大水害における救済景観—南京を事例に—」

・ 2月14日

山村は甲賀市観光まちづくり協会・甲賀市教育委員会・水口ロータリークラブ主催『甲賀流戦国歴史講演』にて、「古地図から探る東海道と水口」の講演を行った。

・ 3月14日

山村は、「地域空間論演習」の授業の一環として、伊丹・塚口の巡検を行った。資料作成と現地説明は、院生の松岡宏樹・小出桂矢が担当した。

・ 3月19日～22日

山村は、三河の中近世城郭・城下町・古戦場をテーマとした巡検を行った。拳母・岡崎・作手・長篠・新城・吉田・田原の現地踏査を行った。学生も参加した。

・ 3月24日

学部卒業式・大学院学位授与式が行われ、学部は有田拓世、榎田康平、田中諒、塚本まゆ子が卒業した。大学院は夏日宗幸（指導教員小方）が博士を、張鯤翼（指導教員小島）、松岡宏樹（指導教員小方）、村上才門（指導教員山村）が修士を修了した。

・ 3月25日

山村は、文化庁文化財審議会第3専門調査会文化的景観専門委員会の現地調査のため、静岡県静岡市有東木と掛川市東山の茶畑を訪問し、現状視察と行政・住民・諸団体と意見交換を行った。

・ 3月26日～28日

東洋大学およびオンラインにて開催された日本地理学会の2021年春季学術大会において、以下の発表が行われた。北西諒介・夏日宗幸「武蔵野の新田村落名にみる「前」の意味に関する考察」。

・ 3月30日

森下航平は共編者として『2020年度実践型地域研究「大学・地域連携」活動報告書—京都府北部(宮津・福知山・その他)編—』を発行した。

・ 3月31日

山村の「岐阜における城下町の変遷とその特徴」が掲載された『史跡岐阜城跡 総合調査報告書Ⅰ』（岐阜市編）が刊行された。

・ 3月

小島が共著者となった『社会科中学生の地理—世界の姿と日本の国土 指導書』（帝国書院）が刊行された。

・ 4月1日

山村は、三重大学大学院地域イノベーション学研究科の客員教授として、前年度に引き続き、博士課程の学生の共同指導に従事することとなった（2022年度も継続）。

4月7日

修士課程に仇楚文、岑曉玲、孫錦、趙冠璋、陳則新、塚本まゆ子、楊奕珉、劉姝恵が入学した。博士課程に松岡宏樹が進学、村上晴澄が編入学した。

・ 5月7日

山村担当科目の「ILASセミナー：歴史地理学」一環として、吉田の巡検を行った。TAで院生の塚本まゆ子が補助を行った。

- ・ 5月14日  
山村担当科目の「ILAS セミナー:歴史地理学」の一環として、北白川の巡検を行った。TA で院生の塚本が、資料作成と説明を担当した。
- ・ 5月21日  
山村担当科目の「ILAS セミナー:歴史地理学」の授業の一環として、百万遍の巡検を行った。TA で院生の塚本が、資料作成と説明を担当した。
- ・ 5月23日  
山村は、「地域空間論ⅡB」の授業の一環として、大和筒井・郡山城下町の巡検を行った。資料作成と現地説明は、8名の受講生で分担し、TA で院生の三好志尚と松岡宏樹が補助した。
- ・ 6月18日  
小島は、「地域空間論演習Ⅰ」の受講生と宮津市の巡検を行った。油田昇太が TA として参加。
- ・ 6月27日  
山村は、「地域空間論ⅡB」の授業の一環として、姫路城下町の巡検を行った。資料作成と現地説明は、8名の受講生で分担し、TA で院生の三好と松岡が補助した。
- ・ 8月10～13日  
小原文明法政大学文学部准教授による集中講義「地域空間論Ⅳ／経済空間論」が行われた。
- ・ 9月7日  
京都大学(人文研)でオンライン開催された東アジア環境史学会(Conference of East Asian Environmental History(EAEH 2021))において、黄崢崢は「Landscapes of Disaster Relief during the Period of “Socialist Construction” in China-A Case Study on the 1954 Yangzi-Huai Flood.」と題して口頭発表を行った。
- ・ 9月13日  
山村は、彦根城世界遺産登録推進協議会主催の彦根城世界遺産登録推進にかかるワーキング会議にて、「城下町の形態的特徴を探る—地形環境と河川下流域の西国城下町—」の発表を行った。
- ・ 9月23日  
山村は、浜松市主催の『文化財の保存と活用がつむぐ歴史都市・浜松の未来』に、パネリストとして参加した。
- ・ 10月10日  
山村は、静岡市歴史文化施設プレ企画講演会『地理と歴史からひもとく静岡の歴史:駿府城下町はなぞだらけ?』にて、「地図から考える駿府城下町の立地とかたち」の講演を行った。
- ・ 10月22日  
山村担当科目の「地理学基礎ゼミナールⅠ(読図)」の一環として、聖護院周辺の巡検を行った。TA で院生の塚本まゆ子が、資料作成と説明を担当した。の講演を行った。
- ・ 10月29日  
山村担当科目の「地理学基礎ゼミナールⅠ(読図)」の一環として、二条周辺の巡検を行った。TA で院生の塚本が、資料作成と説明を担当した。
- ・ 10月30日  
山村は、天橋立を世界遺産にする会主催の『天橋立世界遺産市民講座』にて、「中世都市研究からみた丹後府中」の講演を行った。
- ・ 10月31日  
山村担当科目の「地域空間論演習」の一環として、福知山・園部城下町の巡検を行った。資料作成と現地説明は、文学研究科博士課程の安岡達仁と経済4回生の吉田彬人が担当し、TA で院生の村上晴澄が補助した。
- ・ 12月4日  
谷口は、「安威川ダム・安威川流域の水環境」と題して巡検を行った。研究室内外に参加者を募り、建設中の安威川ダム、安威川周辺の用水および集落、高瀬川親水水路、旧茨木川跡、三箇牧揚水機場や番田水門などの安威川下流域の用排水施設、淀川右岸の集落などを巡った。
- ・ 12月21日  
三好志尚は、京都大学人間・環境学研究科2021年度後期教養教育実習として、全学共通科目の「地域地理学」において、京都大学の全学部向けの授業を行った。
- ・ 12月26日  
山村は、飛騨市教育委員会主催の『飛騨の城跡へ行こう!オンラインツアー 飛騨の城下町』に

## 研究室だより

パネリストとして参加し、「金森長近のまちづくり」の講演を行った。

### ・ 12月

人文地理学会歴史地理部会と佛教大学宗教文化ミュージアム共催で2021年7月18日に開催された『学術シンポジウム 都市祝祭：歴史地理学者にはどう見えるのか』の「後評」を、部会世話人代表の山村が執筆し、シンポジウム報告書（長谷川奨悟編）に掲載された。

## 2022年

### ・ 1月12日

NHK放送の番組『歴史探偵』にて、山村がCG地図監修を行った「武士の都・鎌倉」が放映された。

### ・ 1月29日

山村は、京都府立亀岡高校にて、「地図から地域を読もう—亀岡の地理と歴史—」の出前授業を行った。授業の様子は、「中心部に学校集中なぜ？亀岡高で地図から歴史読み解く講演会」の記事になり、1月30日付の京都新聞・丹波地方版に掲載された。

### ・ 2月18日

山村担当科目の「地域空間論演習」の一環として、神戸・兵庫津の巡検を行った。院生の三好志尚と塚本まゆ子が資料作成と説明を担当した。

### ・ 2月23日

山村担当科目の「地域空間論演習」の一環として、枚方・橋本・八幡の巡検を行った。総人3回生の井上匠梧と文3回生の池田雄士が資料作成と説明を担当した。

### ・ 2月28日

森下は共編者として『2021年度実践型地域研究「大学・地域連携」活動報告書—京都府宮津市等での地域連携を振り返って—』を発行した。

### ・ 3月5日

小島が研究代表者となって2016年に始められた集落再編科研はコロナ禍で1年延長され、その最終研究会が、人間・環境学研究科棟105会議

室とZoomオンラインのハイブリッドで開催された。

### ・ 3月6日

山村は、愛知県立大学地域連携センター主催の『長久手4Uワーキング：長久手まち歩きマップ制作ワークショップ』にて、「地図から考える長久手」の市民向け講義と巡検指導を行った。

### ・ 3月13日

京北・美山のバス巡検が行われた。集落再編科研における中国研究者と農村振興にかかわる討論資料の作成を目的として、北山林業・道の駅・廃校利用・小さな拠点・かやぶきの里をまわり、各所で黄崢崢・岑曉玲・趙冠璋による中国語説明を録画した。

### ・ 3月14日

日本地理教育学会全国地理学専攻学生卒業論文発表大会において菊川は、「地域愛着の形成過程—地域資源の担い手を対象に」と題する発表を行った。

### ・ 3月18～21日

山村は、尾張の中近世城下町と現代都市化をテーマとした巡検を行った。岩倉・小折・大高・緒川・長久手・守山・名古屋東部の現地踏査を行った。学生も参加した。

### ・ 3月24日

学部卒業式・大学院学位授与式が行われ、学部は粟田口大樹、井野遙斗、菊川翔太、武優樹、中垣太樹、藤本涼、村居優花、森下宗一郎が卒業した。大学院は潘藝心（指導教員小島）が博士を、油田昇太（指導教員小島）、上田航平（指導教員山村）、王韻堯（指導教員小方）、関蔽（指導教員小方）、小出桂矢（指導教員山村）が修士を修了した。

### ・ 3月25日

小島は、四條畷高校のキャンパス訪問において「中国はどこまで巨大になるのだろうか？」と題して模擬授業を行った。

### ・ 3月31日

小島は、人間・環境学研究科長の2年間の任期を終えた。

北西は、武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館発行

の『武蔵野ふるさと歴史館だより』第9号に「千町野の新田村落名における「前」の意味」(共著者・夏目宗幸)を寄稿した。

・ 3月

小方登「衛星画像と地形データ (DEM) を利用した歴史的場所の検討」と小島泰雄「蜀道から考える関塞としての秦嶺」を所収した。辻正博編『中国前近代の関津と交通路』(京都大学出版社)が出版された。

・ 4月7日

博士課程に金澤良輔、李琪が入学した。また、修士課程に黄昱邦・真柄享永・武優樹・吉田彬人が入学した。特別研究学生として小島が受け入れた胡曉亮氏(南京師範大学地理科学院博士研究生)が渡日し、1年間の留学を開始した。

・ 4月

藏田は、神戸芸術工科大学にて、「人文地理学」の非常勤講師を担当した(2022年度前期)。

・ 5月14日

山村は、京都大学総合博物館・京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター主催の『2022年度特別展 埋もれた古道を探る 関連講演会』にて、「地図から考える吉田の歴史地理」の講演を行った。

・ 5月15日

山村担当科目の「ILAS セミナー:歴史地理学」の一環として、向日市域の巡検を行った。TAで院生の武優樹が、資料作成と説明を担当した。

オンラインにて開催された第48回交通史学会大会において、以下の発表が行われた。村上晴澄「戦国～江戸時代初期の街道交通と宿駅の発展」。

・ 5月20日

山村担当科目の「ILAS セミナー:歴史地理学」の一環として、吉田山東麓から銀閣寺道の巡検を行った。TAで院生の武が、資料作成と説明を担当した。

・ 6月4日

小島は、同志社大学で開催された現代中国学会関西西部会大会において、共通論題シンポジウム「日中関係の回顧と展望—日中国交正常化 50

周年に当たって」の司会を務めた。

・ 6月5日

山村担当科目の「地域空間論ⅡA」の一環として、摂津小浜寺内町と池田城下町の巡検を行った。資料作成と現地説明は8名の受講生で分担し、TAで院生の村上晴澄と金澤良輔が補助した。

・ 6月10日

小島は、UNITY研究会において「農村に暮らすこと—中国と日本」と題する報告を行った。

・ 6月18日

小島は、「地域空間論演習Ⅰ」の受講生と京田辺市の巡検を行った。黄崢崢がTAとして参加。

・ 6月26日

山村担当科目の「地域空間論ⅡA」の一環として、大垣城下町の巡検を行った。資料作成と現地説明は、8名の受講生で分担し、TAで院生の村上と金澤が補助した。

・ 7月25日

『臨床教育人間学』16巻に以下の論文が掲載された。森下航平「地域実践において根本問題を考えることの意義—京都府福知山市夜久野町における「丹波漆」を題材としたアイデアブック制作の実践を例に—」

・ 8月2日

山村は、岡山県立津山高校の京都大学研修にて模擬授業「今と昔の地図を読む—津山城下町から現代都市津山へ—」を行った。

・ 8月7～9日

山村は、文化庁文化財審議会第2専門調査会伝統的建造物群保存地区専門委員会の現地調査のため、鳥取県大山町所子・倉吉・若桜の伝建地区を訪問し、現状視察と行政・住民・諸団体と意見交換を行った。

・ 8月10日

山村は、石川星稜高校の京都大学訪問にて模擬授業「地図から歴史を読む—金沢—」を行った。

・ 9月5～8日

関戸明子群馬大学教育学部教授による集中講義「地域空間論V/歴史地域論」が行われた。

・ 9月17日

## 研究室だより

山村は、大阪歴史学会研究集会『戦国・織豊期権力論と城郭研究』にて、「歴史地理学からみた城下町と城郭—近江を事例として—」の発表を行い、シンポジウムにコメンテーターとして参加した。大会の様子は、「京滋の城跡記 対論 考古学 VS 文献学 天下のぞむ構え」の記事となり、10月7日付の京都新聞・地域プラスに掲載された。

・ 9月21～22日・26日・29～30日

山村は、愛知県立大学文学部にて「歴史地理学」の集中講義を行った。

・ 9月22日

山村の「紀伊半島の地形環境と街道・港—地形図の読図による歴史空間の考察—」が掲載された『歴史遺産が地方を拓く—紀伊半島の文化財—』（藤田達生編、清文堂出版）が刊行された。

・ 9月28日

阿部は、京都府でただ一人残る、西陣織の杼職人長谷川淳一さんの工場見学を、研究室の院生達とともに行った。

・ 9月

山村の「地形図に読む輪中と城下町都市：岐阜県大垣市」が掲載された New Support 高校社会 38（東京書籍編集・発行）が刊行された。

・ 10月2日

山村担当科目の「地域空間論ⅡA」の一環として、大和八木・今井寺内町と橿原神宮周辺の巡検を行った。資料作成と現地説明は、総人3回生の東優大と池田芽生が担当した。

・ 10月9日

山村担当科目の「ILAS セミナー：歴史地理学」の一環として、太秦天神川から太秦にかけての巡検を行った。TA で院生の武優樹が、資料作成と説明を担当した。

・ 10月16日

山村は、福井県立若狭歴史博物館主催の『令和4年度特別展 中世若狭の「まち」関連イベント わかはく講座』にて、「地図から考える若狭湾沿岸の港町」の講演を行った。

・ 10月17日

招へい外国人学者として小島が受け入れた杜娟先生（陝西師範大学西北歴史環境と経済社会発展研究院助理研究員）が渡日し、1年間の在外研究を開始した。

・ 10月25日

山村は、京都府立亀岡高校にて「江戸時代の亀山城下町の復原図を作ろう・歩こう」の出前授業と巡検を行った。

・ 10月30日

山村担当科目の「地域空間論ⅡA」の一環として、天理の巡検を行った。資料作成と現地説明は、文3回生の安藤智哉と福山一茂が担当した。

・ 11月4日

山村は、三重大学大学院地域イノベーション学研究所主催の『第7回研究内容講演会』にて、「東海の城下町にみる都市計画—駿府と名古屋を中心に—」の講演を行った。

・ 11月11日

南京師範大学の農村地理学研究者との学術交流を「中日農村振興策略研究交流—農村土地・空間的開発と再利用—」をテーマにオンラインで実施。

・ 11月19日

人文地理学会大会が佛教大学で開催され、小島は特別研究発表（植村善博：日本の禹王遺跡—治水神・禹王信仰と禹王文化）の座長を務めた。

・ 11月20日

佛教大学紫野キャンパスで開催された2022年人文地理学大会において、以下の発表が行われた。村上晴澄「戦国時代末期における東海道の形成—徳川家康の所領に着目して—」。吉田彬人「『長宗我部地検帳』にみる高知平野の職人居所分布」。河本大地、柴田将吾、菊川翔太、小林夕莉、森下航平、高原佳穂「農山村地域の学校統廃合に伴う地域学習体系の再構築とそのマネジメント—京都府南丹市美山町の小・中学校における「美山学」の事例から—」。

・ 11月26日

山村担当科目の「地理学基礎ゼミナールⅠ（読図）」の一環として、福井の巡検を行った。TA で院生の真柄享永が、資料作成と説明を担当した。

東京・東洋文庫で日中共同研究「中国当代史研究」ワークショップ（第13回）が開催され、黄崢崢は「社会主義建設期における食糧生産とその供出・調達的空間—1953～1955年宿県専区の事例からみた食糧難—」（原題：社会主义建设时期的粮食生产及征购，调配的空间-1953-1955年宿县专区的事例所见的粮食短缺问题）と題して報告を行った。

・ 11月30日

山村の「景観復原とその応用」が掲載された『人文地理学のパースペクティブ』（竹中克行編著，ミネルヴァ書房）が刊行された。

・ 12月3日

山村が企画に協力し案内人として出演した、NHK放送の番組『ブラタモリ』第224回「静岡」が放映された。

・ 12月11日

山村は、地球環境学堂担当科目の「歴史地理学」の一環として、彦根城下町の巡検を行った。

・ 12月10日

小島は、特別研究学生の胡、交換留学生の Uhl Leonie (Freie Universitat Berlin) とチューターの李琪、吉田と地方都市の開発に関する福知山巡検を行った。

研究室だより

あとがき

『地域と環境』17号は2023年3月末をもちまして人間・環境学研究科をご退官されます小方登先生を記念して刊行されたものです。

本号では多くのOBとOGの方々、そして現在所属されている先生方、学生諸君によって多彩な論考が集まりました。その内訳としては、教員・OB・OGが13本、現役院生が4本、学部生が1本です。それぞれのご論考からは地域空間論らしい多様なテーマと関心が伺えます。是非、ご一読ください。(I.Y.)

地域と環境 No.17 2023.3

編集・発行 「地域と環境」研究会  
京都大学大学院人間・環境学研究科  
文化・地域環境論講座 地域空間論分野  
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町  
TEL. 075-753-6595

発行日 2023年3月24日

# Region and Environment

No.17 March 2023

Special Issue on the retirement of  
Professor Noboru OGATA

---

Editorial: On the Publication of this Special Issue

Part I Profile and works of professor Noboru OGATA

Part II Articles

General news

Summary of Doctor's Thesis

Summary of Master's Thesis

News

---

Research Group on 'Region and Environment'  
Graduate School of Human and Environmental Studies  
Kyoto University